



★歌のメモリー 回想五十首選
「森岡貞香」

選・文 中野昭子 (「ポトナム」所属)

Akiko Nakano

拒みがたきわが少年の愛のしぐさ頤に手觸り來その父のごと

【白蛾^{はくが}】

くるしむ白蛾ひんぱんにそりかへり貝殻投げしごとし疊に

薄氷の赤かりければそこにをる金魚を見たり胸びれふるふ

月させば梅樹は黒きひびわれとなりてくひこむものか空間に

をんならの力づくで汚さるる歴史かなしたたかひに死するくるしみといづれ

月のひかりにのどを濡めしてをりしかば人間とはほそながき管のごとかり

かぎりなくみみずもつれて地中より出でてをりそこにきのふは佇ちし

【未知^{みち}】

きつちりと手袋はめしわがまへに胴黒き電柱立ちてゐたりき

編みて寝る垂髪に棒の感じあり息づくときにわれはせばまる

もつこになふ労働者群より黄の埃吹きあげてをり城門のあり

【蹠^{いしたたみ}】

大運河に沿ひつつ夜行すわが少年の父の受弾地は黒きふくらみ

泥壁の孤色してこの集落入りゆくに戸口毎に目がありき

今日もむかし夏のゆふべに倒れるる空罐に雨かがやきてふる

【珊瑚^{さんご}數珠^{じしゆ}】

晝ふけて人さまざまにある車中われは珊瑚の數珠をたづさふ

【もりおか・さだか】一九一六年
松江市生まれ。父、夫ともに軍人。
長男出産。終戦後、夫と死別。
【石疊】主宰。二〇〇九年逝去。
歌集「白蛾」「珊瑚數珠」「黛樹」
【百乳文】(追空賞受賞)、「九夜八
日」「少時」「帯紅」など。

ゆふまぐれ二階へ上る文色なきところを若しかして雁わたる

樹の下の泥のつづきのてゝぶるに かなかなのなくひかりちりぼふ

【黛樹】

おどろきて見ぬ青き棗の快活なる揺れやうは あなたであらむか

啼きながら天ゆくこゑは水草の香ふくちばしをいかにあける

椅子に居てまどろめるまを何も見ず覺めてのちに廚に出でぬ

ヤチダモの林のなかにてわが母は面輪を奥にむけるしとおもふ

電車のストライキさ中人氣なきからくれなるの室生寺ありけり

今夜とて神田川渡りて橋の下は流れてをると氣付きて過ぎぬ

【百乳文】

きのふまたけふ廚の方へ行かむとし尻尾のごときを曳きてをりけり

大鉢を引き摺りにつつ薔薇の繁りを連れて敷き瓦のところに来たり

この海星の場合 港灣に突き出たる concrete のうへにて死せり

わが庭のかへで紅葉にありつるを近所の道のそここを飛ぶ

をみな古りて自在の感は夜のそらの藍青に手ののびて嗟かな

飼猫をとちこめしかどいつしかや葬のまにまに猫の居りけり

けれども、と言ひさしてわがいくばくか空間のごときを得たりき

そのかみの百日紅は軍帽の赤き總なり忘れねば見る

子供らのあそびにまじる棒切れがそそのかしをりあそびながらに

夜の風の其處にて消えぬ日比谷なる濠のみづのうへなる終り

【夏至】

日常を歌う方法

戦後、あたらしい歌を模索する女性たちが結成した女人短歌会。会の中心は戦前からすでに活躍していた歌人たちであったが、その中に新人森岡貞香がいた。昭和二十八年に刊行されたたちまち評判になった『白蛾』は、戦後すぐに軍人の夫が急逝し敗戦の世に子供と二人残された孤立感や、病弱の身体と向き合って生きる不安感が歌われていた。内面の息苦しさをあぶり出すかのようにモノを一途に見つめ、写真とは異なる現実的な方法に挑戦した歌集であったが、境涯的告白に通じる歌が混じっていた。そのことを「言いようがないほど恥ずかしかった」と言っていた。この思いが後の作品の方向性の決定に大きく影響する。

短歌はまもなく前衛短歌が隆盛の時を迎え意味や喩を重視するなかにあって、葛原妙子や齋藤史らの女性歌人もみずからの世界を形成してゆく。しかし、森岡はそれらとは異なる方法の模索を続けた。境涯的作品とは一線を画した方法の確立は第五歌集『黛樹』、次の『百乳文』で確

昨きのこひと夜ゆたんば抱けば追熟といふべくわれのやはらかにある

すうえたあを胸むねに巻くなど雨冷ゆる日は流行にしたがふ人われ

老いにたる母は王様湯浴みののちをマントのやうに大きタオル着て

【敷と妙た】

死しにてゆく母の手とわが手をつなぎしはきのふのつづきのをとつひのつづき

入口いりぐちに杖つえが置かれてあるやうなる初冬の朝に驚かされる

朝光あさひけのひろびろしきに昨きのこの夜のつきかげありしあたりを掃かきぬ

毛織けりも毛深けきがなかに踏みこんである椅子いすの足あしずんぐりとして

【九夜八日ここのややうか】

舐なめるといふことのたのしみにありしかば大壇おほの壇の中の蜂はちの蜜滅みつめつる

霧吹きりふきの壇壇を持つわれ梅うめしろくにほふ下したにて物を思おもはず

薔薇ばらのつる雪ゆきの重おもみに下くだりぬしなほくだりこむと椅子いすにゐておもふ

五つ六つどんぐりの實みをころばしててーぶるのうへにわれの手てのあり

【少時せうじ】

百年ひゃくねんのやまざくらの樹きに更さらにのこる少時せうじのあらむ花はなの色いろあはれ

杖つえのやう山毛櫟やまけりの折れ枝えだのありしかばいづべに行かむ人ひとひとり待つ

【帯紅おびべにくれなゐ帯びたり】

朝あさありて髪かみを束たばねつ 在あるわれの常とこのかたちになりぬるあはれ

夕方ゆふがたに出いでてをりしに母ははの手てを取りて歩あみし道みちのありたり

悲哀かなしみこの朝あさにあり鈍感どんかんの昨夜きのこありけり からうじて私わたし

戦後せんごとふ言ことの葉はを身寄みよりのごとく戀こふ戦後せんごを生なきて亡なきを語りて

夕方ゆふがたにて何なにとなく夕方ゆふがたらしくなすと古ふるき椅子いすに凭たれてをりぬ

固かたたるものにした。

NHK学園短歌大会（平成十年）

において「日常の歌」を講演。斎藤茂吉や土屋文明の歌などを例にして日常茶飯の歌であっても複雑な人間の断片を切り取れるし、非常に豊かな美しい世界を開いてくれる可能性があると言ひ、大切なことは「歌い方」と練りかえし述べていた。

森岡の「歌い方」は言葉の使い方や配置に留意すること。それはなだらかな意味の伝達を求めためになく、互いにせめぎ合うかのような言葉の働きにより、日常を、存在や時間を感じさせる新たな歌空間へと拓くことであつた。さらに短歌が定型詩であることへの信頼は「白蛾」以来変わらず、定型が崩れる寸前まで定型を自在に使いこなし内面の緊張感をしらべに託した。「歌い方」は、一読すれば森岡の歌と分かるような、つまり文体の発見であつたといえる。日常から歌うことにこだわり続けた森岡は、独自の手法と意識を残した。